

## 幸福・正義・公正をどう実現するか？

▶▶▶ 山口大学 准教授 小川仁志

### ■はじめに

幸福・正義・公正といった言葉は、よくニュースに出てきたり、政治家が口にするのを聞いたりするが、どうも身近に感じられない。ところが、実際には、私たちの社会は幸福や正義が実現されている必要があるし、また公正でなければならない。はたしてこれらの概念は一体何を意味するのだろうか？

学問の分野でいうと、政治学や政治思想、あるいは倫理・哲学の世界でこれらの概念をめぐる議論がなされている。いずれも抽象的な概念を扱う学問分野だけに、難解な印象を受けるが、本来は実生活の具体的な問題を解決するなかで出てきた議論である。そこで、以下では具体的な問題を題材にして、これらの概念の意味を考えていきたい。

### ■幸福とは何か？—無縁社会の問題を考える

日本では、都市への人口集中に高齢化や未婚率の上昇が重なって、単身者が孤立する現象が生じている。いわゆる無縁社会の問題である。そうした地縁関係の希薄化が原因で孤独死する人の数も増え、大きな問題となっている。実はこの問題の解決は、個人と社会のあり方をめぐって、どういう関係が人々を幸福にするのかという議論にかかわってくる。そこで、個人と社会のあり方をめぐると対極的な思想をそれぞれ紹介したい。リバタリアニズムとコミュニタリアニズムの二つである。

リバタリアニズムとは、自由至上主義とも訳される政治思想の用語である。そして、リバタリアニズムを主張する人たちをリバタリアンとよぶ。一般的には、個人の自由や選好を最大限尊重する極端な個人主義の立場をさす。つまり彼らは、国家からの干渉が少ないほど幸福だと考えるのである。もっとも、その内容は幅広く、国家をまったく廃止するという立場から、ある程度の国家のか

わりを認める立場までさまざまである。

そのなかでも、この思想が広まるきっかけとなったのが、1970年代、アメリカの政治哲学者ロバート・ノージックによって唱えられた最小国家論である。最小国家というのは、国家を廃止しないまでも、その役割を国防や裁判、治安維持といった最小限にとどめようという主張である。

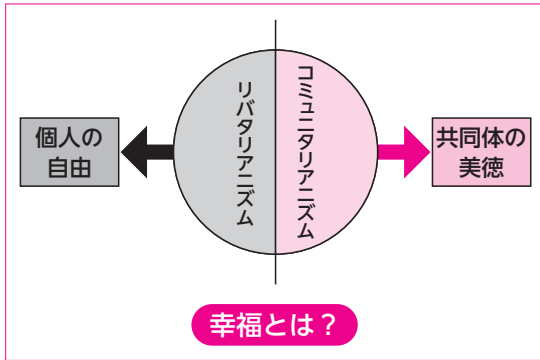
ノージックらリバタリアンは、**国家が裕福な人に課税し、その財源によって不遇な人に再配分を行うことは、財産権の侵害になると考えている。**この思想によると、社会福祉などの相互扶助は否定され、人々は自分で身を守るしかなくなる。

これに対して、コミュニタリアニズムとは、共同体主義とも訳される政治思想の用語である。コミュニタリアニズムを主張する人たちをコミュニタリアンとよぶ。1980年代アメリカで、彼らはそれまで隆盛だったリベラリズムを批判して、「リベラル・コミュニタリアン論争」を巻き起こした。

例えば、その代表的論者であるアメリカの政治哲学者マイケル・サンデルは、リベラリズムのいう「自己」の概念は、歴史や伝統、そして共同体といった文脈から切り離されたバラバラの個人を意味していると批判した。そうではなくて、**むしろ私たちは、自分の属する共同体と深く関係をもつ存在であって、それゆえに共同体に対して愛着をもっているはずだと主張するのである。そしてそこではぐくまれた美徳を重視しようとする。**いわばコミュニタリアニズムというのは、共同体における助け合いのなかに幸福を見いだす立場であるということができる。

では、無縁社会の問題にこれらの思想をあてはめて考察してみよう。まず個人の自由を極端に重視するリバタリアニズムによると、地縁関係が希薄なことは問題ではなく、単身者の孤立化は、自己責任によって解決すべき事がらとなる。逆に

コミュニタリアニズムによると、地域における助け合いこそが美德であり、孤独死などが起こらないように社会と個人のかかわりを深めることで解決することになる。さて、あなたはどちらの社会により幸福を感じるだろうか？



### ■正義とは何か？—命の意味を考える

正義という言葉ほどあいまいなものはない。なぜなら、何に価値をおくかで、正義の内容は変わってくるからである。そこで「トロッコ問題」とよばれる有名な事例を使って考えてみたい。あなたはトロッコ電車の運転士だとしよう。そのとき、急にブレーキがきかなくなってしまった。そのまま行けば前方で作業をしている5人を殺すことになる。ところが、待避線にハンドルを切れば、前方を歩いている1人を殺すだけですむ。さあどちらを選ぶかという問題である。

このとき、功利主義と定言命法という二つの対立する思想のいずれをとるかで、結果が異なってくる。なぜなら、この二つの思想が考える正義の意味が異なるからである。

まず功利主義というのは、イギリスの思想家ジェレミー・ベンサムによって唱えられたもので、ある行為の善悪についての判断を、幸福や快樂をもたらすか否かに求める倫理観をさす。そして、幸福や快樂の量が多ければ多いほど正義が実現されているとする。

この原理を社会に適用すると、社会にとっての正しい行為とは、ひとりひとりの幸福や快樂を足し合わせた際、より大きくなる場合であるということになる。それが「最大多数の最大幸福」とい

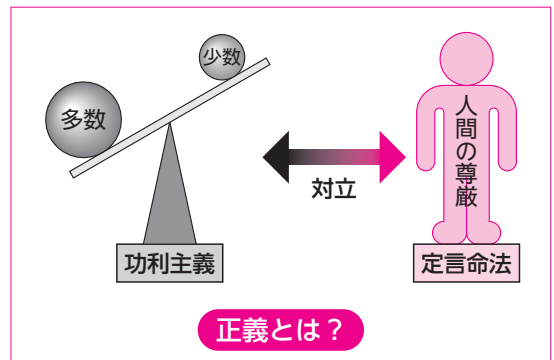
う有名なスローガンによって表現されている内容である。

このスローガンによると、**社会の利益を最大化するためには、少数の人が幸福になるよりも、多数の人が幸福になる行為のほうが望ましいことになる。**つまり、不幸になる少数者が犠牲になるのはやむをえないと考えるのである。

この功利主義に対抗する思想が、ドイツの哲学者イマヌエル・カントによって唱えられた定言命法である。カントの義務論ともよばれる。カントは「～すべし」というように、**正しい行いについて無条件の義務を求める。それが正義だということである。**具体的には定言命法は、「あなたの意志の基準が、常に皆の納得する法則に合うように行為しなさい」という形で公式化される。私たちの行為の基準は、誰が採用しても不都合や矛盾の生じない、常にあてはまる原則にもとづいたものでなければならないという意味である。

というのも、**道徳**というのは、条件次第で変わるものであってはいけなからだ。お金を積みば道徳の基準が変わるといのは、おかしいと考えるのである。問題は、この原理によっても、何が正しいかというなかみまでは確定することができない点である。これについてカントは、「人間を決して手段にすることなく、目的として扱いなさい」という内容の公式を提示する。つまり、**人間の尊厳を守ることだけは、道徳の原理として絶対に正しいとされるわけである。**

では、トロッコ問題を二つの思想にそれぞれあてはめてみよう。まず功利主義によると、数が多いほど幸福の量が増え、正しいとされる。したがっ



て、5人を救うために、あえてハンドルを切って1人の命を奪うことが正義になる。逆に定言命法によると、たった1人でも人間の尊厳を守る必要があるので、わざわざハンドルを切って命を奪うのは正しくないということになる。だから何もしないことによって5人の命が奪われるが、それはしかたないのである。さて、あなたはどちらの立場に正義を感じるだろうか？

### ■公正とは何か？一途上国支援を考える

途上国の支援はどうあるべきか。残念ながらこの世の中には貧富の差が存在する。とりわけ先進国と発展途上国の間の経済格差は非常に大きく、支援を行う必要がある。社会には公正が求められるからである。

しかし、一口に公正といっても、その実現方法には考え方の違いが存在する。例えば、現代リベラリズムを代表するロールズの正義論と、センのケイパビリティという二つの思想の対立がそれである。

アメリカの政治哲学者ジョン・ロールズは、多様な価値観のなかで、公正な分配はいかにして可能かを考えるために、正義論を唱えた。彼はまず、ある種の思考実験を提起する。つまり、人々は「無知のヴェール」という制約を課されることで、みな自分自身の年齢や能力、社会的地位といった特定情報を知らないものと仮定するのである。これを「原初状態」とすることで、真に公正な分配の方法を考えようというのである。

そのうえでロールズは、次のような「正義の二原理」を掲げる。まず第一原理によって、各人に平等に自由が分配される。ただし、ここでいう自由は言論の自由や思想の自由、身体の自由といった基本的な自由に限られる。次に、第二原理によって、社会的・経済的不平等については、ある地位や職業につくための機会の均等が保障されている場合にのみ認められる。その際、もう一つの条件として、最も恵まれない人が最大の便益をうるような形でのみ富の再分配がなされるのである。

こうしてロールズは、自由の行き過ぎに歯止めを

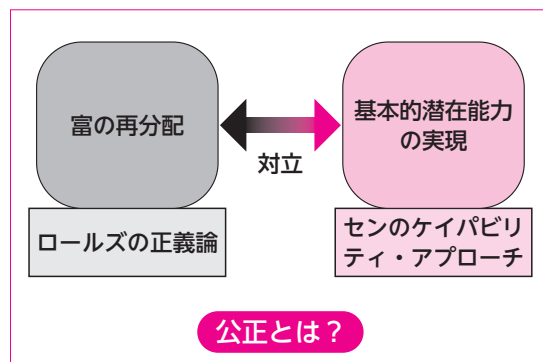
かけるために平等を説いたわけである。これに対して、インド出身の経済学者アマルティア・センは、ロールズの正義論は物の再分配にとどまっており、それでは物心崇拝になってしまうと批判する。

そこでセンは、人間存在の多様性やニーズの多様性を明らかにするために、障がい者と健常者の間の不平等に目を向ける。つまり、同じ物を与えられても、健常者ならなうることを障がい者はできない可能性があるということだ。

ここからもわかるように、むしろ求められるべきなのは、個人としての最も基本的なニーズであるケイパビリティ、すなわち基本的潜在能力を実現することだと主張した。ケイパビリティとは、人が善い生活や善い人生を生きるために、どのような状態にありたいのか、そしてどのような行動をとりたいのかを結びつけることから生じる機能の集合を意味する概念であるといえる。

つまり、まずは体を動かして移動したり、共同体の社会生活に参加したりすることが可能になるようにすることこそが公正だというわけだ。センはこのような支援方法をケイパビリティ・アプローチとよんだ。

では、途上国の支援について、これらの思想をあてはめてみよう。まずロールズの正義論をあてはめると、最も恵まれない人たちに富を分配するということになる。逆にセンのケイパビリティによると、富の分配ではなく、貧しい人たちが自分でやりたいことをやれるような能力を身につけさせてあげるということになる。さて、あなたはどちらの方法をより公正だと感じるだろうか？



## あなたの考える幸福・正義・公正とは？ 練習問題



- Q1** あなたの住む町が地震に襲われたとしよう。幸い自分の家の被害は少なく、多少の食料のたくわえはある。ところが、近所には倒壊した家もあり、食料に困っている人たちがいる。行政は自宅にある食料を近所で分け合うようさかんに呼びかけている。さて、あなたならどうするだろうか？
- Q2** あなたは自動車会社の経営者だとしよう。自社の自動車に欠陥があり、それが原因で死亡事故が起こっているようである。ただ、このことはまだ外部に知られていない。このとき、設計変更するよりも、裁判で賠償金を払ったほうが安いとしたら、あなたはどうか判断するだろうか？
- Q3** ある途上国に、教育を十分に受けられない子どもたちがいるとしよう。あなたはそんな子どもたちのために何かできないかと考えている。もしあなたにお金があったとしたら、どのような形の支援をするだろうか？

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 練習問題 解説 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

個人の価値観にかかわる問題については、絶対的な正解があるわけではない。ただ、自分にとって何が幸福であり、何が正義や公正なのか、普段からよく考えておく必要がある。いざというとき、自分の立場を明確にすることができるように。

**Q1** 災害時にどれだけ地域で助け合う必要があるか。これは、どのような社会のあり方を幸福と考えるかという個人の価値観にゆだねられている。リバタリアニズムによれば、行政の呼びかけにしたがって、自分の食料を拠出する必要はないことになる。実際、アメリカの南東部をハリケーンカトリーナが襲った際、暴動が起こり、食料の略奪があったという。リバタリアニズム的な考えの人が多いと、こういう結果になりうることが予想される。これに対して、コミュニタリアニズムによれば、助け合う社会こそが幸福な社会になるので、食料を拠出することになるだろう。世界も称賛した東日本大震災後の人々の助け合いは、まさにコミュニタリアニズムの実践例とみることができる。

**Q2** 企業においてどのような経営判断をするか。これもまた個人の正義の観念にゆだねられている。この場合、功利主義なら、費用の計算をして、より

得をするほうが正しいと判断することになるだろう。したがって、設計変更せずに賠償金を払う結果になる。これに対して、定言命法によると、たった1人の命にもお金にはかえられない尊厳があるのだから、設計変更をするのが正しいという結論になる。実はこれは、フォード・ピント事件という実際にあったケースをモデルにしている。フォード社は功利主義にもとづいて設計変更をしなかった。その結果死亡事故が増え、かえってばくだいな懲罰的賠償金を払わされることになったのである。

**Q3** 途上国への支援にはさまざまな形がありうる。大きく分けると、お金や物資を分配する方法と、人々に働きかせぐ能力を身につけさせてあげる方法が考えられるだろう。いずれがより公正なものと考えられるかは、個人の価値観にゆだねられている。この場合ロールズの正義論によると、お金を分配するという方法をとることになるだろう。これに対して、センのケイパビリティ・アプローチによると、お金を分配するのではなく、子どもたちが実際に教育を受けることのできるしくみや状態を整えることこそが公正な支援ということになるだろう。女子が教育を受ける権利を訴えてノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイは、まさにそんな支援を呼びかけているといえる。